



永久平和を願って 次世代に戦争体験を語り継ぎたい

私の戦争体験談 ②
広島広報課
☎24-8801

昭和16年12月8日、日本は真珠湾攻撃に続き、米英に宣戦布告。ついに戦争に突入しました。

陸軍は開戦から50日くらいで、東南アジアのマレー半島を南下進撃。そのままシンガポールを攻め落としました。当時、郡家国民学校初等科の3年生だった私たちは、日本の勝利に日の丸の小旗を振って「万歳万歳」の大合唱。そ



B-29爆撃機による爆弾投下の様子。日本各地でB-29による爆撃が行われ、高松空襲もその一つ。

の後、勢いづく日本軍は、さらに北へ南へと各方面に進撃しました。時は経ち、開戦から約1年半後

大東亜戦争（太平洋戦争）と 国民学校の生徒

郡家町 草薙 正美

の昭和18年5月29日、校長先生は朝礼で、北アメリカのアッツ島で日本軍2千6百人が玉砕したことを私たちに告げました。日本初

の組にも4、5人が来ていました。が、近くの与北村のお寺には、集団疎開で20、30人くらいの子どもが来ていたそうです。戦争は、教育にも影響を及ぼします。学校では毎朝、東の宮城（皇居）に向かって最敬礼。帰る前には「海行かば」の歌を唄い、「国のために奉公、大君（天皇）に忠義」と教育されていたのです。5年生

の玉砕です。それまで快進撃を続けていただけに、本当に驚きました。また、南半球のソロモン海でも戦闘していると聞かされたときは、戦争が激化していると子どもがに感じとりました。その頃になると、国内では食糧不足で物資も次第になくなり、学校の教科書も上級生のお下がりが。通学には下駄やわら草履が当たり前でした。

都会では、子どもは危ないからと、親元を離れて田舎へ疎開。私

のとき、担任の先生が来ないので欠勤かと思っていたら、「召集令状で軍隊に入隊です」と伝えられました。先生は最初から、下士官での入隊です。私たちはそれを誇りに思いました。「お国のために命をささげることが美德」という考えが当たり前だったのです。戦争は日増しに激しくなり、昭和19年7月にはグアム島とサイパン島、その後も日本軍は次々と玉砕。本土では空襲が始まりました。それでも日本は神の国だから、戦争で負けるはずがないと信じていました。ラジオのニュースでも勇ましく軍艦マーチが流れ、大本営発表で、敵航空母艦2隻撃沈、敵戦艦3隻撃沈といった勝利の知らせが流れるたびに、大人と子どもが一緒に「ヤッター、ヤッター」と歓喜の声を上げていました。しかし、昭和20年に入ると、3月の東京大空襲に始まり、大阪やその他の大都市が敵のB-29爆撃機によって、次々焼かれていきました。そして迎えた7月4日、まだ暗

い早朝の出来事でした。私のいるところから30キロも離れた東の空が、夕焼けのように真っ赤に染まりました。遠くからでも激しく燃えているのが分かるほどでした。高松空襲です。

私自身も怖い思いをしました。外にいたときのことです。急に敵機グラマン戦闘機が急降下。低空飛行で、私の頭上をかすめるように飛び去りました。撃たれて死ぬのかという恐ろしさで、全身を震わせながら必死で伏せていたことを今でも忘れられません。

そして、昭和20年8月、広島、

長崎へあの恐ろしい原爆が投下され、ほどなく日本が無条件降伏して終戦となりました。終戦の日から数えて、今年で75年。今の子どもたちに、私たちのような思いをさせたくありません。二度と戦争のない、平和な時代が続きますよう祈りたいと思います。

用語の説明

- ◆大本営発表：大本営（戦時の天皇直属の最高統帥機関）が発表する戦況の情報。戦争末期には、戦況が悪化しているにも関わらず、優勢との情報を流していた。
- ◆海行かば：当時の大日本帝国政府が国民精神総動員（国家のため自己犠牲で尽くす精神を推進した運動）強調週刊を制定した際のテーマ曲。